



日本トランスパーソナル心理学/精神医学会
第 16 回学術大会

心理学に魂を取り戻す

平成 27 年 12 月 19 日 (土) / 20 日 (日)

会場：イーグレひめじ

(兵庫県姫路市本町 68-290 / Tel. 079-289-3443)

第16回学術大会：「心理学に魂を取り戻す」の開催にあたって

大会長 實川 幹朗

現代の心理学が扱う「心」は、はたして本物だろうか。多くの心理用語が、いまや常識に組み込まれた。だがそれは、ほんとうに私たちの暮らしの、また森羅万象の心根を映しているのだろうか。泡沫のごとき心理学ブームがあったし、いまも余韻が残る。向精神薬の処方と結び付いた、手軽な診断の普及も、世の「心理学化」を後押しする。しかし、そうした「心の姿」の適切さへの保証は、どこからも得られていない。

心理学は、西洋の十九世紀に誕生した。日本ではちょうど明治維新の頃にあたる。物理学は古代からあるのに、呆れるほどの遅さ、新しさだ。なぜそうなのか？ - 多くの心理学者が信ずるのとは異なり、心についての知識が遅れていたからではない。近代心理学の誕生は、むしろ、有史以前からの深い知恵が、特殊な時代の特殊な精神により、曇らされた結果に他ならない。

西洋化に忙しかった日本人は、この出来たての思想も喜んで取り入れた。このとき以来「意識」という薄っぺらな、しかも正体不明なものを「心」と呼んできた。それが「近代の心」なのだ。

私たちはかつて、もっとよく、ずっと深く、心に通じていた。そのころ心は、「魂」とか「霊」などと呼ばれていた。それは人間の一人ごとに備わり、また森羅万象に備わり、あるいは浮遊し、互いに訪れあい、助け、守り、教え諭し、慈しみ、ときに怒り、怨み、崇り、取り憑くのだった。神仏も、ここに含めて考える。

自分自身の靈魂のあり方はもちろん気になるが、このたびはむしろ、出会う相手方としての靈魂を軸に据えたい。近ごろではそれを、錯覚や「迷信」と呼ぶ人が多くなった。近代心理学／精神医学でなら、ほとんどが「幻覚」となる。だが、そんな証明ができたわけではないのだ。ここでは、そうした近代の枠組みを疑い、外してゆきたい。

東日本大震災のあと、被災地では靈魂の体験談が広がりを見せた。命と死が動くとき、靈魂の動きも大きくなる。「心のケア」は、これ抜きでは語れない。今また、ネパールに大震災が起こり、多数の犠牲者が出た。きっとこのたびも、靈魂とのおびただしい出会いがあるのだろう。

トランスパーソナル心理学は、個人の意識の枠を広げ、瞑想体験や意識の変容を扱いつつ、「近代の心」の乗り越えを図ってきた。いま、これをさらに広げ、今でも私たちと出会い、交じわる靈魂を語りたい。近代の心の曇りを晴らすには、近代の蔑んだ立場を見直すのがよい。かつての「新しい」心理学は、もう古くなっている。もっと古い魂で磨き、錆びを落とし、産まれ変わらせようではないか。

古い立場は、けっして廃れていない。ただ、学問の外に追いやられ、タブーとなっているのだ。だから、慎重に踏み込まねばならない。下手をすれば、足を取られる。しかし、ほんとうの心の宝を取り戻す務めが、私たちにはあるはずだ。このたびの大会を、そのための確かな一歩としたい。

[大会スケジュール]

12月19日(土)

午後13時

受付開始

午後13時30分ー17時30分 公開シンポジウム 「魂との出会いを語る」

会場：3階 あいめっせホール

シンポジスト： 吉村哲明 (弘前愛成会病院)
渡辺順一 (金光教羽曳野教会長)
太田 宏 (曹洞宗僧侶)
立石光正 (修験道行者)

指定討論者： 石川勇一 (相模女子大学教授)

司会： 實川幹朗 (姫路獨協大学教授)

※ シンポジストに鎌田東二氏をご案内しておりましたが、急なご用事のため参加いただけません。お詫び申し上げます。

午後17時45分ー18時45分 分科会 「死とともに生きる」

会場：3階 あいめっせホール

発表者： 村川治彦 (関西大学)

午後19時ー21時

懇親会

会場：4階 ミレ

12月20日(日)

午前10時ー12時

特別講演 「心の真如を求めて」

講師： 田原 亮演 師 (真言律宗僧侶)

講演会場：4階 セミナー室C+D

瞑想会場：4階 和室1

午前12時ー13時30分 理事会・昼食

会場：4階 セミナー室C

午後13時30分ー14時 会員総会

会場：4階 セミナー室C+D

午後14時ー16時 個人研究発表 「魂・霊について」 会場：4階 セミナー室C+D

司会： 小室弘毅 (関西大学)

午後14時ー14時30分

「霊魂の研究法の問題」 発表者： 實川幹朗 (姫路獨協大学)

午後14時30分ー15時

「旅立った患者さんからのメッセージ」 発表者： 坂井美賀子 (加納病院)

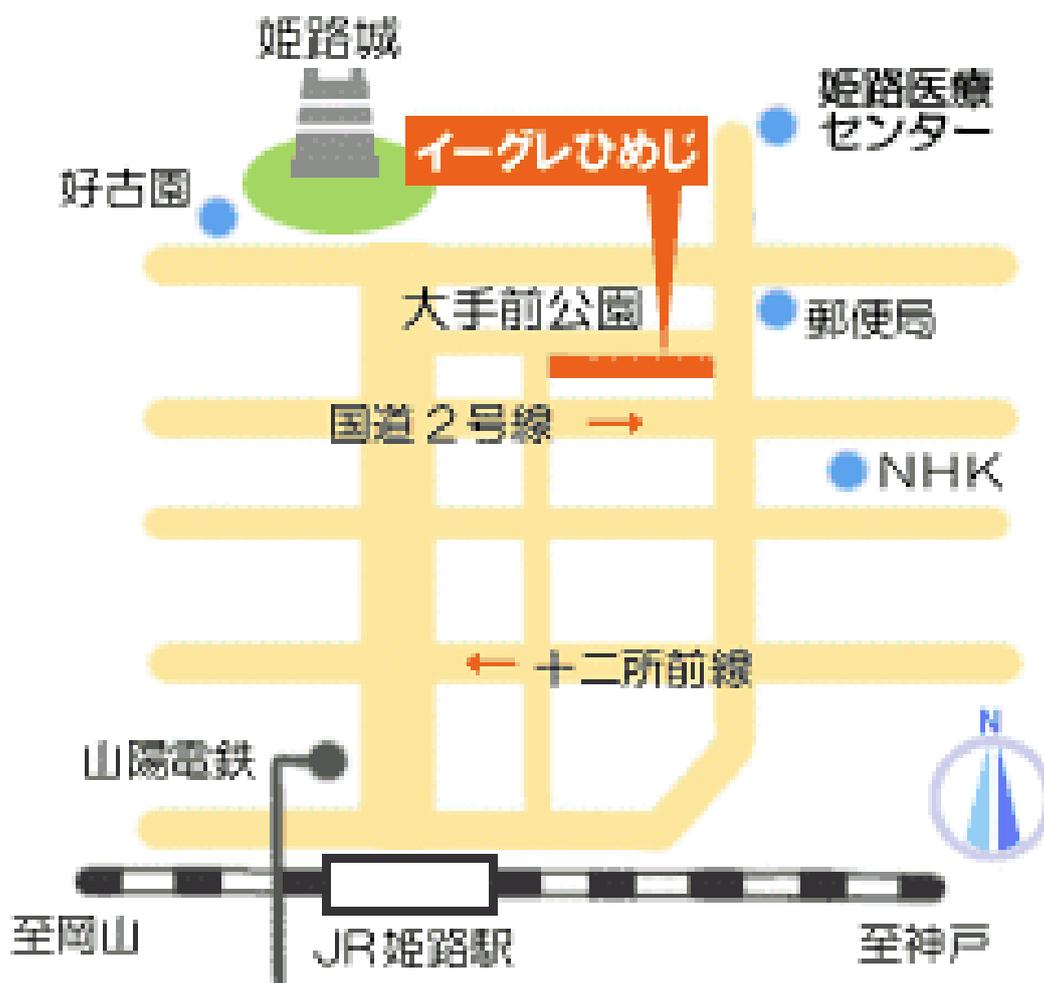
午後15時ー16時

「さとの心理学」 発表者： 鈴木研二 (茨城キリスト教大学)

午後16時 閉会の辞

大会長： 實川幹朗 (姫路獨協大学)

【会場への行き方】



◎ 会場までは、姫路駅から1キロ程度なので、徒歩でおいでになるのが便利でしょう。

J R 姫路駅からは、

- 1 「中央改札口」を出て、姫路城方面(右手)に行きます。(正面にお城が見えるはずです。)
- 2 お城に向かい大通り(大手前通り)を北に進みます。
- 3 お城の手前、右手が「大手前公園」で、その南側に「イーグレ」があります；全面ガラス張りの、特徴ある建物です。大通りからはちょっと東に入ります。
- 4 大手前通り東側「みゆき通り」というアーケード商店街の中を進むとイーグレの脇に出ます。

- * お体の具合などで歩きづらい方には、バス もあります。(無線LANが、駅前停留所で使えます)
- ・ 姫路駅バスターミナル北側の 7・8・9・10・14・17・18 番のりば からお乗り下さい。
 - ・ 上記から発車するバスはすべて「姫路城大手門前」に停車 (希にある大学直通便は例外です)
 - ・ 姫路駅から二駅目で、運賃 100 円 (PiTaPa、ICOCA が使えます)

① イーグレの北玄関「あいめっせホール」へ

「御幸通り」のアーケードを北に抜けるところからの眺め：
手前の大きな入り口よりこちらの方が便利です。



②ホールへのエレベーター

北玄関を歩いてすぐ右手に、
エレベーターがあります。



③ 学会事務室と和室の入り口

4階の西寄りです



④研究発表会場方面

エスカレーターを上がって振り向いた眺め



【参加される方へ】

受付は19日（土）の午後13時から3階あいめっせホール前にて行います。

20日（日）は4階セミナー室C前で行います。

【参加費】（公開シンポジウムのみ参加は無料です）

学術／一般会員	3000円	（当日3500円）	学生会員	2000円	（当日2500円）
非会員	3500円	（当日4000円）	非会員学生	2500円	（当日3000円）
懇親会	5000円				
ワークショップ	3000円	（追加選択）			

【研究発表について】

- ・パソコン・プロジェクターは係りの者が操作いたしますので、会員総会終了後、機材の調整をお願い致します。配布資料は20部をご用意のうえ、受付までご提出ください。

【会員総会】

- ・20日の昼食休憩後、午後1時30分から開催いたします。理事会からの年次活動、会計報告の他、学会の今後の活動についての意見交換をさせていただきますので、会員の方は必ずご参加ください。

【宿泊】

- ・市内に多数のホテルがありますので、各自でご予約下さい。以下に例を御紹介します。

☆受け付けの際には、宿泊ホテル名を必ずお書き下さい。（補助金申請のためです）

◎会場に近いものとしては；

ホテルウィングインターナショナル姫路

<http://www.hotelwing.co.jp/himeji/>

姫路グリーンホテル

<http://www.greenhotel-himeji.com>

◎設備の整ったところでは；

ホテル日航姫路

<http://www.hotelnikkohimeji.co.jp>

【懇親会場と飲食などのご案内】

- ◎ 懇親会場は、「イーグレひめじ」四階にある【ミレ (Millet)】です。姫路城の夜景がきれいで、場所も便利なので選びました。

【ミレ (Millet)】 <http://www.hotpepper.jp/strJ000032340/>

※ 懇親会は飲み物の持込が自由です。

* 大会では休憩所を設ける場合もありますが、この度はとくに用意していません。会場内に無料で利用できる椅子やテーブルが各所にあり、また館内と周辺に飲食店も多いためです。適宜ご利用下さい。

=====

- ◎ 姫路には漁港と食肉施設とがあり、魚も肉も地物がおいしいところです。食文化を楽しみたい方のため、お店の候補をいくつか上げておきます。

◇ 景色が良くてちょっと美味しい(はずの)ところ

【SORA NIWA】 <http://tabelog.com/hyogo/A2805/A280501/28007698/party/>

フランス料理で、結婚式場でもある。会場から、徒歩で二、三分です。

◇ 地元の食材を使った本格中華料理

【紅鶴】 <http://tabelog.com/hyogo/A2805/A280501/28006786/>

本格派ですが、そんなに高くありません。

(駅前にも支店がありますが、本店のほうがオススメ。)

◇ シニアソムリエのオーナーシェフがやっている小さなフランス料理二軒。いずれもよい葡萄酒を安めに提供してくれ、遅い時間にはワインバーとしても使えます。

【Vin Vin】 <http://tabelog.com/hyogo/A2805/A280501/28004184/>

【グラン・ブルー】 <http://tabelog.com/hyogo/A2805/A280501/28032355/>

◇ 日本人なら和食、とくれば

【鳴神】 <http://tabelog.com/hyogo/A2805/A280501/28033319/>

姫路でその名を知られた「谷勝さん」という板前がいます。居酒屋的な料理でも品質は飛び抜けています。(量は少なめなので、コースのほうがお得かもしれません。)

◇ 姫路で一番人気のイタリア料理

【イル・フォルノ】 <http://il-forno.sakura.ne.jp>

その名のとおり大きなピザ窯があり、いろいろな料理をそれで作ります。

(人気店なので予約するのが安心； ¥3800 のコースで質、量ともに充実。)

- ◇ 金に糸目をつけず！美味しいものを食べるなら
【瓢亭】 <http://www.hyoutei.com>
もちろん行ったことはありませんが、美食家のさる社長が褒めていました。

- ◇ B級の極みならここ！
【赤心】 <http://tabelog.com/hyogo/A2805/A280501/28006662/>
豚カツの店ですが、豚汁が好評

- ◇ 焼き肉の店はどこも高品質です。
- ◇ 駅近くには小さな安い、そこそこ美味しい寿司屋が何軒かあります。

【公開シンポジウム】

魂との出会いを語る

近代心理学の狭い「心」を離れ、古代よりの靈魂の研究を取り戻したい。ことに、日本人として研究を進める立場から、現代日本での靈魂の振る舞いを知りたいと考えました。ここで靈魂とは、人間はもちろん森羅万象に備わり、あるいは浮遊し、互いに訪れあい、助け、守り、教え、慈しみ、ときに怒り、怨み、祟り、取り憑く何ものかのことです。神仏も含まれます。

このたびは、出会いかけてくる相手方としての靈魂を中心に据えます。近代心理学／精神医学でなら、病的な「幻覚」か、そうでなくとも個人心理の反映と説明される体験です。そうした枠組みを疑い、外してゆきたいと考えます。

そこで、つね日ごろ靈魂と出会い、靈魂との付き合いをお語りいただける方々に、シンポジストをお願いしました。さまざまな角度からのお話が聞けるよう心配りしたつもりです。学者として文献や理論の考察に通じられる方にも、このたびは実践家としてのお話に期待しています。

吉村先生以外はすべて非会員です。そこで学会長の石川先生に、学術的立場からの指定討論をお願いしました。(文責=大会長：實川)

☆シンポジスト紹介

- ◎ 吉村哲明 | 本学会理事。弘前愛成会病院 精神科医師。弘前大学客員教授。靈性に配慮した地域精神医療を実践する。論文：「神秘的体験を伴う精神病状態を経て、息子への虐待行為が消失した一女性例」「Process Oriented Memory Resolution の効果と可能性-3 症例を通じての検討」など。昭和 36 年生。
- ◎ 渡辺順一 | 金光教羽曳野教会長。「ソウルイン釜ヶ崎 - 野宿者 問題を考える宗教者連絡会」「一般社団法人。支縁のまち羽曳野希望館」などの社会貢献運動。著書：『神様の涙-生神金光大神の誕生』『金光教誕生物語』など。昭和 31 年生。
- ◎ 太田宏人 | 著述家。曹洞宗僧侶。医療と介護の臨床および東日本大震災の被災地でメンタルケア(チャプレン活動)。元「ペルー新報」編集長 雑誌『SOGI』『仏教タイムス』に寄稿 二度の臨死体験を有する。著書：『逝く人・送る人 葬送を考える』『いまどき養生訓 ~医療ことわざ 100 選~』など。昭和 45 年生。
- ◎ 立石光正 | 修験道行者。山学道。青年時代に国内外を旅して靈的体験。修験道総本山金峯山寺にて五年間修行。百日回峰行(大峯)などの修行を重ね下山(現在も熊野に住む)。金峯山鍛流三好清快入道法螺御流初代講師として十三年間指導。平成二十三年、修験道の枠にはまらない自然道の修行の場「山学道」を開設。「一般社団法人実践修験道ワーク協会」を設立し、世界中から訪れる修行に志す人を指導。昭和 31 年生。

☆指定討論： 石川勇一 (本学会会長 相模女子大学教授)

☆司会： 實川幹朗 (本学会理事 姫路獨協大学教授)

発題趣き

◎ 津軽のカミサマ・神・仏・霊との出会い …… 吉村哲明

演者の居住する青森県津軽地方では、岩木山北麓の聖地・赤倉を拠点とし、カミサマと呼ばれる民間巫者が活動を続けてきた。成巫過程は様々で、仕える神との関係によってそれぞれ独自の宗教活動を行っているため、カミサマの具体的な営みを一般化して論じることは難しい。しかし神々との直接的かつ濃厚な関係を有し、その特殊な霊能力によって依頼者個別の苦悩に対し解決策を講じている点は共通していると考えて良いだろう。

今回は、ある女性カミサマに着目し、その成巫過程や日常生活における神・仏・霊との関わりを紹介する。彼女の巫業はすべて神・仏の教示によるもので、解決の手がかりはしばしば死者の語りによって得られている。「障り」のいわれを丹念に探し出し、これに応じた供養を行うことにより、神・仏・霊は安定し、依頼者の問題は解決する。

こうしたカミサマの体験や営みを、学問的解釈をはさむことなく提示する。

◎ 「神徳」；神々・精霊と人との交わる世界 …… 渡辺順一

「もの狂い」や「ものつき」を狂気の世界に囲い込み、信仰の世界から切り離していくことになる近代社会の成立は、教祖没（明治16年）後の金光教団にとっても、大きな影響を及ぼされる歴史変動であった。神々・精霊と人との交わり合う「神徳」の世界は、次第に教団の周縁部分へと追いやられていった。

しかしながら、明治末頃までは、金神信仰・犬神信仰などそれぞれの地方の講活動・民俗宗教と連続する形で、神の「お知らせ」による預言や病氣直し、神々・諸霊の憑依、祈念による悪霊祓いなどは広範に見られたし、戦前期を通じて、「ご神水」・「ご神米」の授与、病者・怪我人の患部に「お土」を塗る、「お神酒」を口に含んで願い主の身体に吹きかける、膿を口で吸い取る、病者と共に入浴しながら身体を撫でる、などの呪術的治療行為は日常的に展開されていた。今、改めてそれらの宗教的意味を問いたい。

◎ 死者と生者の魂の交流 …… 太田宏人

● ペット供養の現場から

亡くなったペットの魂はどこへゆき、将来において、どこで飼い主と再会するのか。人間の死者は、自らの family と一定の距離を取りつつ、こちらに還ってくる魂（先祖）となる。しかし、ペットが先祖になることはない。ペットとの対比において、日本人の他界観（六道ではなく、実は二道のみ）、死者と生者の魂の交流の観念を炙り出したい。

● 霊魂の行方

ペルーではかつて、日本人移民が亡くなると、肉体はペルーの地に埋めた。しかし、遺髪や爪、埋葬地の土を日本へ送った。肉体はともなく、魂は「還らねばならない」存在だった。この観念は、同じく魂の帰還を想定した盆にも同期するが、ここに日本人の「霊魂教」を観る。

● 還れない魂が生者を苦しめる

被災地での見聞から。特に、町の復旧よりも、墓の復旧を優先させた事例を紹介。災害での死別体験も交え、生者が死者の冥福を祈るだけではなく、死者もまた生者の幸福を祈るという、日本人のプリミティブな霊魂観を考えてみたい。

◎ 神々と供養と光と音 …… 立石光正

若い頃、悶々とした日々が続く。暗黒舞踏に出会い、日常生活、会話、意識に衝撃を受けた後、一緒に旅するが、ヨーロッパで分かれた。アフリカ、中東、インドを旅した。モロッコは、瀕死状態になったが奇跡的に治癒した。シナイ半島では、神の幻影に出会い、包まれた光を受け取った。

岩手県遠野、冷害で亡くなれし人々の供養塔五百羅漢の前でオカリナを吹く。全て光り輝いた。私は何をする人ぞ、自覚した。後、修験道の行者となった。修験道は、日常生活をしながら在家の信仰をする日本古来からの在家の山岳宗教である。修行中、開祖を行者を信じて疑わなくなった。護摩加行満行。ひどいひび割れが完治した。

百日回峰行満行。東京の古物商にて成道会の曼荼羅を受ける。

現世界遺産、熊野大雲・小雲取越付近、不法投棄問題が起こると、神様に頼まれた気がして、熊野蔵王大権現の使いとして、他に三問題を八年間にわたって取り組み、解決に導いた。

今回はなぜ法螺貝を吹くのか、なぜ山念佛を唱えるのか、餓鬼に布施・回向、神佛、精霊達を供養するとはどういうことなのか、行者の心！ 実際に何が！

書物には書いていない本質に触れてみたい。

【以前のご案内では、シンポジストとして鎌田東二氏（京都大学教授/神道学/比較宗教学）を記載しました。しかし、急なご用事のため参加いただけないことをご報告し、お詫び申し上げます。】

【特別講演とワークショップ】

心の真如を求めて

— 特別講演と瞑想の会 —

講師 田原 亮演 師

現代日本有数の修行者でいられる田原亮演師をお迎えし、行の体験を踏まえた心のあり方の講演と、瞑想法の指導をいただきます。

瞑想は、技法の適切さはもちろん、指導にあたる師の境地が重要です。田原亮演師は、真言律宗の僧侶で観音寺(奈良県生駒市)の住職。

昭和19年 広島県生まれ

大学で工学を学び、技術者として働くが求道の思い強く、昭和50年に高野山専修学院卒業。その後、行の道に入られる。檀家を持たず、修業に精進されるとともに、加持祈祷もなさいます。戒律の研究、復興にも力を注がれています。ともに真言宗の困難な行法

「虚空蔵求聞持法」を二度、

「八千枚護摩行」を九度、成満

著書：『行に生きる』『救いの風景』『在家仏道入門』ほか

(受講には、大会参加費とは別に¥3000が必要です。)

【研究発表】

心霊研究の方法について

一証明と出会いと一

實川幹朗（姫路獨協大学）

【「操作証明型」と「出会い納得型」の研究法】

古代から続く心霊研究に近代科学の方法論を導入する展開が、十九世紀の末から起こった。霊魂がもしあるなら科学で解明できるはずとの信念で、自然科学と似た方法で霊魂の实在証明を求める。この方法を「操作証明型」と呼ぼう。

しかし、科学は万能ではない。また、客観・中立の建て前とは裏腹に、大幅な偏りを含んでいるのだ。自然科学的世界観の偏りには次の三つがあり、心霊研究は足を取られたし、今も取られている。

- ・（人間の）意識中心主義＝＜意識革命＞
- ・ 一意的な因果的決定論
- ・（人間の）脳への＜心の囲い込み＞

この世の出来事はすべて、原因と結果の組み合わせで一意的に決まり、知識の基準は人間の意識に他ならず、意識とは人間の脳の働きだという。いずれも科学的根拠はない形而上学で、キリスト教神学が入り込んでいる。三つの欠陥を取り去れば「出会い納得型」の研究となる。むしろ、古代からの仕来りに繋がる方法である。

【意識中心主義の限界】

意識中心主義が力を付けた十九世紀半ばの思想史上の変革を＜意識革命＞と呼ぶ。ひと言にすれば人間の「意識」が革命を起こし、世界を乗っ取ったのだ。「意識」こそもっとも確実で、すべての科学技術・学問を支えるとの思想である。そして今なお、この革命政権は続いている。ちょうど、近代の心霊研究の始まるころだった。

注意すべきは、西洋人がキリスト教の神を乗り越えたつもりでも、「絶対者」観念からは抜けられなかった点だ。＜意識革命＞とは、意識が神様に代わって支配者となる革命だった。しかし、「意識」の本当の意味を知る人は少ない。いや、いるはずがない。意識を記録し表現する難しさは、大まかに言って二つある。一つは、意識が「今」にしかなく、証拠に残せないこと。もう一つは、意識とその相手方とを区別できないことだ。富士山を見ているときは、「富士山が」見えている。「富士山についての意識が」見えているのではない。どうやって意識だけを取り出し、示せるのか。

だから意識は、記録も表現もできない。「意識」という言葉には学問的な中身が無いから、ともかくも「確かなもの」があると思ひ込めればすむ。絶対に確かな、唯一の知識の源が人

間の手許にある一この人間中心主義を「明らかな謎」とでも言うべき「意識」が支える。新しい「指導者」は、かつての神から名前を変えただけに過ぎず、キリスト教が今は科学主義・科学信仰に姿を変えているのだ。

現代の科学は物証で固めるので、表立っては意識に頼らない。だが科学は、観測・測定を意識に示せと求める。観測・測定に用いるのは、感覚なのだ。いくら機器が進歩しても、最後は人間がデータを読み取り、人間の意識に入る理論をまとめる。「公共性」とか「再現性」と呼ばれるのは、こうした意識の、しかも「正常で健康な」意識の動員なのだ。

自然科学の定説は、この要求を満たしている。と、建て前上は言われる。すなわち、＜意識革命＞による「真理」の条件は、今も生きている。しかし、そもそも意識とは「明らかな謎」でしかないから「公共性」も「再現性」も、建て前通りの実行などできない。できないことを「真理」と宣伝しているのが実情である。

【「操作証明型」の方法と近代心霊研究の躓き】

では、自然科学はじっさいに何をしているのか。＜意識革命＞の「指導者」が力を発揮するには、因果的決定論と＜心の囲い込み＞が必要となる。世界の出来事は、すべて原因と結果の組み合わせで一意的に決定しており、同じ条件が揃えば、結果も同じになるはず。 「再現性」だ。しかし、因果決定論そのものを証明はできない。キリスト教の神の許ではすべてがあらかじめ決まっているとの信念で、この神を引き継いだのが、法則を認識する意識なのだ。その意識はすべて、人間の脳のなかにある。いま流行りの脳科学は、これに基づいている。

「再現性」の中身は、あくまで人間の目の前で再現だ。それが「公共性」のある証明となる。科学は、世界を人間の勝手に理解し、動かせると考えている。世界を人間の操作に委ねる思想なのだ。人間の力の及ばない法則、人間の前に現われない事実は考えていない。

しかし、この方法への過信が心霊研究を誤らせた。マイヤーズは、科学的な方法こそただ一つ真理に至る道だと強調していたが、晩年になって調査対象だった霊媒に騙されたと感じ、自分の研究を「忌まわしい徒労」と嘆かざるを得なかった。研究方法そのものに、そうした行為を引き出す傾きがあったのだ。

近代の心霊研究の始まりが、＜意識革命＞に重なったのは偶然ではない。フォックス姉妹の「ポルターガイスト」との会話は、一八四七年だった。それが、研究の対象となったのは、意識にくっきりと表われ、だれでも経験のできそうな形だったからだ。意識に示しさえすれば証明になるなら、そのための手段を工夫しようとする。 不当な考えだが、＜意識革命＞の原理には合致しているのだ。そのため自然科学研究には今でも、バルサルタンのデータ偽造やSTAP細胞をはじめ、不正が付きものだ。

霊魂もやはり、生身の人間と同じくあちら側の都合があり、気分があり、隠したり騙したりできる。そこに「操作証明型」は通用しない。加えて私たちの祖先は、また世界中の人びとが、前近代までは森羅万象に心を認めていた。それぞれの考えを持ち、あちらの都合で動き、研究者を含む人間とやり取りし、互いの間柄で振る舞いを変えてくる。だからこうした研究に、人間の勝手に「再現性」と「公共性」を求めては筋違いなのだ。

【出会い納得型の提案】

霊魂の明らかな兆しがあっても、多くの実験・観察をデータ化し統計処理すれば、有意差は出ない。出る場合でも偏りの量はわずかで、サンプルの採り方により消えてしまいかねない状態だ。それは、統計が個別の事情を考慮できないからで、霊魂を科学が否定したのではない。

「出会い納得型」の研究法を採るべきで、操作証明型の方法の前提はすべて裏返す。一意的な因果決定論は決定不能の多元的因縁論になり、＜心の囲い込み＞が森羅万象がお互い様で出会う汎心論に、意識の優位は無意識や変成意識に道を譲る。

大乘仏教の説く因果因縁論のほうがむしろ実情に近かろう。原始仏教の因果は一意的決定論に近く、こんにちもテラワードはこの考え方を採るが、捉われなくてもよい。また、仏教を持ち出さなくとも、我われが日ごろ世間、人びとと付き合っているやり方を、霊魂にも当てはめればよいだけだ。人の気持ち、世間の風はなかなか読めないが、まったく分からないのでもない。厳密な「真理」の一意的な認識は必要なく、その時々気分、流れから、＜おのづから＞知れてくるのだ。自から「認識する」というより、「知らされる」の方がよかろう。

このとき夢の教えも大切である。古来から世界中の人びとが夢を、無意味な幻でなく、深いまことを伝えると考えてきた。その解釈を、科学が否定できたことはない。科学主義が根拠無く嫌悪し、排除しているだけだ。夢を意識で明らかに説明する理論はない。臨床心理学の理論はみな、意識中心で偏っている。むしろ、縁に導かれて出会い、機に応じて納得できる体験を重んじたい。それが、出会い納得型の研究となる。物質についてさえ、科学は一意的な決定論での説明を尽くせないのだ。

その謎を、意識を超えたところで読み解く業も、古代から世界各地にある。＜心の囲い込み＞を破り、人間以外の様ざまな霊魂と、お互い様で出会う業だ。古代の技を磨き直しつつ、そうした出会いの事例を納得の行く形で示し、積み重ねてゆくのがよい。出会いの意味を、出会った人びとの人生や歴史の動きにからめてまとめ、いわば「霊魂詞」ないし「タマ語り」を編み上げる作法を探るべきなのだ。納得してしまえば済むのではない。誤魔化しや歪みを避け、詐欺や洗脳に繋がらないための工夫がどのようにできるのか、考えてみたい。

旅立った患者さんからのメッセージ

坂井美賀子（加納病院）

キーワード：旅立った患者さん、メッセージ、医療現場

【はじめに】

医療の現場は、命が始まり、また終わるところである。すなわち、靈魂の動くところである。ここで、筆者は旅立った患者さんからメッセージを受け取る体験をした。その症例を提示し、考察する。

・個人的体験

この発表をするにあたって、筆者の靈的体験について、記載する。

約15年前の就寝中に、筆者の眉間に円形の刺激を感じて目を覚ました。痛みはないが、何かで円形の刻みを付けているような感覚であった。そこに「私」以外の他者が介入していると感じ、心の中で（何をなさっているのでしょうか？）と問いかけると、（そのうちわかる）と答が返ってきた。その後より、患者さんからのメッセージを受け取るようになった。

・基本的理念

この体験をしたころに、筆者はブライアン・L・ワイスの「前世療法」（1996）、飯田史彦の「生きがいの創造」（1999）を読んでおり、これらの本の影響を受け、無理のない範囲で、これらの考え方を生かした医療を心掛けている。

癌死に限らず、老衰であっても、死が病院の箱の中で行われるようになって以来、死は一般の人々からは遠いものとなり、恐怖を伴うものとなってきた。そこで筆者は、死の臨床に際し、受け入れ可能な患者や家族に対しては、飯田の生きがい論（2006）を用いることにしている。生きがい論の有用性については、大石ら（2008）が学生の死生観教育による生きがい感の影響を研究発表しており、その有用性が確認されている（大石・安川・濁川、2008）。

【症例提示】

症例1 A氏：80代、男性、難治性神経疾患の患者さん。

A氏は、神経疾患と廃用のため、車いす生活であった。認知力の軽度低下も認められた。A氏の妻は定期的に面会していたが、病気で急逝された。妻の他界について、本人に伝えるかどうかを長男に相談したところ、本人には伝えないと決定された。

その後、A氏の体調が変化し、意識レベルが低下した。数日後、A氏は他界したが、意識レベル低下から他界までが通常よりやや長い経過であった。

A氏の他界後、しばらくしてから、突然A氏の姿が筆者の心に映し出され、「妻がすでに他界していたことを伝えてほしかった」と、無表情で筆者に告げ、ぱっと消えた。

症例2 B氏:50代、女性、生下時より軽度知的障害があり、さらに持病のある患者さん。

B氏に兄弟はなく、両親他界後はホームヘルパーを利用して生活していた。しかし持病が悪化して体調不良となり、他界した。

上記に記したとおり、筆者は飯田の生きがい論を基本理念としているため、B氏の魂は、B氏の人生を選んで生まれてきており、成長し続ける存在だと考えている。B氏は上述の通り知的障害があり、理解力が低下していたため、持病の理解ができず、治療に積極的ではなかった。理解力、判断力の低下から、自分に甘く、他者への依存が強かった。

すべての魂は成長するために生まれてくるならば、B氏がどのような成長を望んで生まれてきたのかが、筆者の大きな疑問であった。知的障害から生じる成長を阻害する壁は、B氏が自力で乗り越えられるものではなかった。

B氏の他界後、筆者の心にB氏と思われる光り輝く存在が現れ、「ただ、体験したかった」と、一言述べると去って行った。

【考察】

これらの症例のメッセージは、すべて患者の他界後に筆者に届けられたものである。そして、どちらの症例も、患者がこの世に存在している間には発することのできないメッセージである。したがって、人は死後に想念を持った形で存在する可能性が高いと推察できる。

また、メッセージの内容も示唆に富む。

症例1は、妻の他界を患者が活着している間に伝えなかった、筆者への強い叱責である。このメッセージによれば、死の直前に患者は大切な人の来訪を待っているということになる。旅支度をしている患者に余計な負担をかけないために、患者にとって大切な人の他界は本人に伝えるように、家族に積極的に働きかけることが重要である。

症例2は、人は体験するために生まれてくる、という、人生を終えた存在からのメッセージである。知的障害によりさまざまな制限が加わった中で、どこまで体験し、挑戦できるか、という高度な学びである。また、死後の基準では、持病を克服する、または受け入れて生きるなどの、現世的な成果は重要ではなく、制限のある肉体で、どれだけ体験し、挑戦したかが重要であると推察される。

【引用文献】

Brian L. Weiss (1988). MANY LIVES, MANY MASTERS. William Morris Agency, Inc., New York. (ブライアン・L・ワイス. 山川紘矢・亜希子(訳)(1996). 前世療法 米国精神科医が体験した輪廻転生の神秘 PHP文庫)

飯田史彦(1999). 生きがいの創造 “生まれ変わりの科学”が人生を変える、PHP文庫

飯田史彦(2006). 決定版 生きがいの創造、PHP研究所

大石和男・安川通雄・濁川孝志(2008). 死生観に関する教育による生きがい感の向上-飯田史彦による「生きがい論」の応用事例, トランスパーソナル心理学/精神医学 8、44-50.

さとの心理学

鈴木研二(茨城キリスト教大学)

【はじめに】

2015 年 5 月下旬、腰痛の痛みどめをもらおうと行った整形外科で、背骨に癌が見つかった。肋骨や肺にも転移があり、翌日には前立腺が原発であることも判明した。

私はたちまちステージ 4 の癌患者になった。あっという間で本人はポカンとしていたが、周りは騒いだ。

1 月ほどで騒ぎは下火になり、私もだいぶ落ち着いた。そして、今後のことを考えた。どうやら私は人生の最終ページにさしかかったらしい。これからはやるべきことを後回しにしないようにしよう、と思った。私は心理学者として『悟りの冒険』でスタートしたから、この際まず、40 数年のさとの研究をまとめておこうと考えた。

【「山父のさとり」-さとの方法】

日本の昔話に「山父のさとり」というのがある。この山父、AD/HDの化身のような妖怪である。かつ、読心術をよくする。そう思ってみると、桶屋は桶屋でKYではないかと想像される。が、それもともかく、私はこの昔話を無心の発見譚として読む。桶屋と山父はここで、自分らには読めない無心に遭遇したのである。

さとりとは無心を読むことである。そのためには、われわれの心の中の桶屋(目に見えるものしか認知しないありよう)と、山父(知覚と有心が全てと思いきむありよう)を、止める必要がある。桶屋と山父-両者を併せて日常性ともいう-を止めることができれば、われわれは無心になる。手塚治虫の漫画「三つ目がとおる」の表現を借りれば、「額のバンソウコウがはがれる」。すると、直観とイメージの働きが感じられる。眼の前には、昼間の空に星々を見るように、無心が開けてくる。それがさとの始まりである。

【悟りのいくつか】

私が 60 数年の人生で経験した悟りは、ざっと並べると以下のようなになるだろうか。

(*1)

主体性、真の自己、空/道、つながり、苦と楽、無常/変化、イナクナラナイ……

これらについては方々で発表してきたので、ここでは説明を省略する>(*2)私は桶屋や山父を止めているという自覚なしに、無銭放浪をしながら、学問研究をしながら、心理臨床の仕事をしている、あるいは癌を患うことによって、時々額のバンソウコウがはがれていたらしい。

【客観・主観・霊観】

無心に眼が開かれると、客観的とはいえないことが認知される。しかも、それは主観的と呼ぶのもふさわしくない。そこで無心に開かれた眼を、客観・主観と並べて、霊観と名づけておく。

霊観で認知する事象は、直観やイメージとして、体験を通じて主体に受けとられる。しかしそれは、客観的事象のように他人に知覚はできない。しかも、山父が読む有心ともちがって、言葉にしてみても、他人にうまく伝わらない。(たとえば、プロ野球の川上哲治が言ったとされる「ボールが止って見える」)

これには理由が二つ考えられる。一つは、言葉にせよ絵画にせよ、表現が芸術的/象徴的にならざるをえないから。もう一つは、その表現を受けとる相手にも霊観的体験がないと、何のことなのかさっぱりわからない。(わかる人間にはわかるのであるが……)

以上が無心や霊観を心理学化する際のアポリアである。霊観の心理学は禅問答集のようになる。わかるには、表現者だけでなく、受け手も修行して、無心を経験する必要がある。

ここでの客観を象徴するのが、さきほどの桶屋である。主観を象徴するのが山父である。両者を「止める」と、無心に開かれる/霊観が開く。

霊観の心理学とは、霊観が経験する事象、その学問化、である。星々の観察が、宇宙の始まりと終りや、その構造を示す学問(天文学/宇宙論)となるように、(無心による)無心の体験/観察は、こころや人生の大きくかつ微細なしくみを解明する学問となる。

【癌/霊/魂-ポンちゃんとのつき合い】

進行癌を告げられ、私はポカンとなった。その際どうやらバンソウコウがはがれたらしい。結果として、認知されてきたものごとがいくつかある。(私は、娘と妻の薦めにより、自分の癌にポンちゃんと名前をつけた)

- ① 人生には終りがある→帰還許可。
- ② 地上とのつながりが強まった→生きる意欲の増大。
- ③ バンソウコウがはがれっぱなしになっている。④ 学会にでてきた←やるべきことを後回しにしない。
- ④ ①～④を私に伝え/引きおこした癌は、物質化している霊であろう。決して悪霊ではない。かといって、いわゆる善霊でもない。善悪を超えた、変化を知らせるメッセンジャーである。しかも-。突然外からきたと思われたポンちゃんは、もはや私にとって、内と外の外には属さない。自他の他でもない。共存していて、内でもあり、自でもある。ポンちゃんは私の魂にすらなりつつあるようだ。いやもしかすると、初めから魂だったのかもしれない。

註

*1 私は、動詞的に使う時はさとりを、名詞的に使う場合は 悟りを用いる傾向がある。

*2 鈴木研二『悟りの冒険』創元社 1990

鈴木研二「生の悟り死の悟り」(『茨城キリスト教大学カウンセリング研究所紀要第30号』2014、所収)

【学術大会の記録】

- 第1回 1999年5月22日・23日 東京医科大学
「心の時代の学問を求めて」
- 第2回 2000年9月1日～3日 国立婦人教育会館
「21世紀に向けて——女性性と男性性・スピリチュアリティ・心理療法」
- 第3回 2001年9月7日～9日 駒沢大学
「心理療法・スピリチュアリティ（霊性）・仏教」
- 第4回 2002年11月22日～24日 立命館大学
「超越学の地平」
- 第5回 2003年11月28日～30日 相模女子大学
「人間社会と霊性（スピリチュアリティ）」
- 第6回 2004年11月5日～7日 花園大学
「禅と現代心理学の新潮流」
- 第7回 2006年8月31日 京王プラザホテル (国際サイコセラピー会議と同時開催)
「心理療法とスピリチュアリティ（霊性）」
- 第8回 2007年11月10日～11日 日本大学
「東西思想の根源にあるもの」
- 第9回 2008年11月22日～23日 関西大学
「生き方の問題：その原点を問う」
- 第10回 2009年11月22日～23日 明治大学
「10周年を迎え、トランスパーソナル心理学の原点を問いなおす」
- 第11回 2010年11月27日～28日 常葉学園短期大学
「トランスパーソナルな体験のもつ力」
- 第12回 2011年12月10日～11日 関西大学
「惑星的思考と伝統の知恵」
- 第13回 2012年10月6日～7日 京都文教大学
「宗教、心理学、そして一人称の科学へ」
- 第14回 2013年11月2日～3日 同志社大学
「トランスパーソナル心理学の源流における東西の交流」
- 第15回 2015年2月28日 日本大学
「トランスパーソナル心理学の潮流と仏教」

日本トランスパーソナル心理学/精神医学会 入会案内

● 会員の種別

種別	資格	入会金	年会費
学会会員	大学・病院・公的研究教育機関に所属している学識経験を有する研究者が対象です。学術発表及び論文発表を行うためには学会会員であることが必要です。入会には学会会員一名の推薦を受け常任理事会の承認を得ることが必要です。大学及び公的研究教育機関に所属していない人（個人の研究所など、その他）の場合、研究業績の提出、審査を要します。	3000 円	7000 円
一般会員	誰でも入会できます。ただし、選挙権・総会での議決権・大会での口頭発言権が制限されます。	3000 円	6000 円
学生会員	学生が対象。他は一般会員と同様です。	1000 円	4 000 円
賛助会員	本会の目的に賛同して、これを援助する個人または団体が対象です。	なし	一口 20000 円
名誉会員	本会の趣旨に関してとくに功績のあった者で、総会で推薦された者としてします。	なし	なし

●入会をご希望の方は、学会ホームページで、設立趣旨、入会案内、役員一覧・会則などをご覧ください。

●「入会申込書」は、下記よりダウンロードできますので、それに入力の上、事務局宛にメールに添付して送ってください。選択肢のある項目は、囲み線などを使ってください。

E-mail: jatp@mail.goo.ne.jp 入会申込書 <http://www.jatp.info/nyukai.html>

●学会会員としての入会を希望される場合は、入会申込書とともに学会会員の推薦書（書式自由）を添付してください。入会申込書にも推薦文の記入欄がありますが、別書式でも構いません。事務局から申請受理の連絡があった後、下記の口座まで入会金・年会費を送金してください。

●学会会員としての入会を希望される方で、学会会員の推薦者がいない場合は、入会申込書とともに、これまでの経歴（書式自由）を添えて申し込んでください。理事会で審査の上、会長が推薦人となって入会を認める場合があります。なお、大学および公的教育・研究機関以外の個人の研究所その他に所属している場合、これに加えて研究業績を提出していただく場合がありますので、ご了承ください。

●一般会員・学生会員の場合は、推薦書は不要です。入会申込書を送るとともに、下記の口座まで入会金・年会費を送金してください。

●賛助会員については事務局までご相談ください。

●なお、会費は年度ごとの決算となります。(有効期限はお申込後の翌年3月31日までとなります)。

●会員名簿の作成に際しては、性別、生年月日を除いて、氏名、職種・役職、所属機関名・住所等、最終学歴・学位、専門分野・領域、現在関心のあるテーマについては、原則的に掲載いたします。個人情報保護の観点から、現住所については、記載の可否を必ずお答えください。

【専門分野・領域】(記入例) 臨床心理学、人間性心理学、トランスパーソナル心理学

【現在関心のあるテーマ】(記入例) 心理療法、ヒーリング、瞑想、スピリット・センタード・セラピー

●会員の特典

- ・ 全会員共通
学会誌の送付 (年1~2回)
ニュースレターの送付
学術大会、シンポジウム等学会主催イベントの参加費割引
- ・ 学会会員のみ
学術大会での研究発表が可能になります。
学会誌に投稿できます。

●問い合わせ・申し込み先

日本トランスパーソナル心理学/精神医学会事務局

〒590-8515 大阪府堺市堺区香ヶ丘町1-11-1 関西大学 小室弘毅研究室

E-mail: jatp@mail.goo.ne.jp

●年会費振込先：日本トランスパーソナル心理学／精神医学会

ゆうちょ銀行 普通 四一八 (ヨンイチハチ) 店 3261973

(記号番号：14100-32619731)

日本トランスパーソナル心理学／精神医学会

(ニホントランスパーソナルシンリカク セイシンイカクカイ)

*入会金・年会費を郵便局から振り込む場合は、郵便局に置いてある用紙をお使いください。次年度からは、年度初めに、ニュースレターとともに振込用紙を同封します。

【日本トランスパーソナル心理学／精神医学会第 16 回学術大会事務局】

第 16 回学術大会 プログラム・抄録集

発行日 2015 年 12 月 1 日
発行者 日本トランスパーソナル心理学／精神医学会
第 16 回学術大会 大会長 實川幹朗（姫路獨協大学）
〒670-8524 兵庫県姫路市上大野 7 丁目 2 番 1 号
jatp.16th@gmail.com

